

一つの終り

藤 家 洋 一

Restaurant Zum RitterはKarlsruhe郊外の田舎町Büchnauにある居酒屋風レストラン。この夜ここに集ったのはドイツ人15名、日本人3名の合わせて18名。ドイツ人は一人を除いて奥さん同伴か、亭主同伴。日本人は私を含めて旅行中の2名とF Z K (Forschungs zentrum Karlsruhe) に留学中のS氏、目下F Z KにはS氏しか日本人はいないらしい。これまでこんなことはなかった。正確に調べたわけではないが、元秘書で日本派を自他共に認め、これまで多くの日本人留学生を永い期間、親身になって世話してくれたW夫人にコンタクトしている人はいないと云う。これまで声をかけると技術系の人を中心に10人ぐらいは集った。奥さんも何人か参加されることが多かった。ドイツ原子力界の現状を如実に物語っているようで淋しさを覚える。ドイツの原子力からの撤退は旧知のドイツ人と同様にここに過した日本人にも淋しさと空しさを与えているように思える。

頃合いを計ってP博士が話し始めた。彼は1971年4月、私が客員としてK F Kに迎えられて以来の仲間である。「私達の友情は26年続いている。あの頃のK F

Kは原子力センターとして活気があった。中でも我々の原子炉開発研究所 (I R E) は彼の表現によれば銀座四丁目で、世界の客がひっきりなしに訪れていた。高速炉開発の世界の一つの中心でさえあった。」

たしかにかつてのドイツはF B R開発の一方の雄として、ベネルックスと連合体を作りDeBeNeのもとにK N K - I、II、S N R - 300、から実用炉へと向う計画を持っていた。また、F B Rの他にも高温ガス炉A V Rはドイツ独自のタドン型燃料が着々と実績をあげ、トリウムサイクルの実現を狙って原型炉T H T Rへと段階を進める一方、燃料サイクルにおいても再処理路線を原子力法に明記し、高レベル廃棄物処理をGohr Lebenの岩塩鉱跡に設定して研究開発を進めていた。

表面順調そうに見えた原子力開発もドイツ社会にはすんなりとは受け止められていなかった。Willy Brandt率いるSPD政権はHelmut Schmidtの力もあって連邦レベルでは原子力を是としていたが、地方レベルでは地方議会、若手党员、労働組合の反対は強く、デモも多く見られた。

すぐれた科学技術の伝統を持つこの国が、その後B & W社の設計に近いMühlheim Kärlich炉の建設へ進むことによって、T M I - IIの事故は社会的にその影響を克服出来たように見えたが、Chernobyl事故では決定的とも云える打撃を受けた。すでに議会にも少数とは云え議席を確保していた緑の党を先頭にし

た反対運動は議論好きのドイツ一般人の否定論的思考と相乗効果を発揮して、次々と計画の破棄や運転中の原子力発電所の停止、廃止へと突き進んで行った。旧東独Gleichs waldのソ連型軽水炉V V E R 5基を運転停止、廃炉に決定したのもこの一連の動きと無縁ではなかったのかも知れない。議論は白熱すると仲々ポジティブな結論には至りにくい。

それでも1970年代のデモは意志表示のためのもので、それほど、人に恐怖を与えるものではなかった。日本の学生の方の方がすごかったが、最近のGohr LebenへのPhilipsburg原発の使用済燃料輸送やフランスからの高レベル廃棄物の輸送を見ると過激で恐怖を覚える。抗議行動なのか、破壊行動なのかよくわからない。果たして社会正義と云えるのか、輸送の安全を保障する警官隊の物量も大変で、これを見ては原子力が社会的合意を得られるような状況にはとてもない。保守派のHelmut Kohl がBundes kanzlerとして14年の永きに亘って政権を維持していても事態は好転の兆しを見せていない。わずかにミュンヘン大学に高濃縮ウランを使用する研究用原子炉の建設が決ったことを灯明と見ても全体としては限りなく暗い。旧知の仲間から一人一人、思い半ばにして年金生活に入っている。

「私達は四半世紀の永きに亘って、彼をはじめ多くの日本人と、そして日本と交流を深めてきた。このことは日独の

原子力の発展に貢献するものと確信してきた。それまで西欧文明のコピーによって成長していると、多少の悪意を持って見られて来た日本に対する印象もこの間で大きく変わった。それよりもドイツが原子力からほぼ撤退する破目となる中で、日本は彼の話によれば文珠問題の対応に苦心し、多くの精力を割かれる中で、今年になって稼働を始めた原子力発電所も、建設へ向けて動きの始った計画もあると云う。日本では未だ原子力が生きている。」

テーブルの上には思い思いに注文した飲物が食事と共に運ばれている。女性の多くが赤ワインを口にしていた。ドイツ人の嗜好が変ってきたことは最近感じていたが、これ程とは思っていなかった。ドイツの赤がうまいとは思っていなかったし、好んで飲む人もあまりいなかったように思う。糖分の含有量が等級を決める指標となっているのが、ドイツの白ワインで、Weinstubeでは目盛の入ったグラスで出したり、ボトルで出したりする。日常はそれ程高級ワインには行きあたらない。Q b AかKabinetあたりでSpätleseになると高級品の認識が出てくる。Ausleseは兎も角、Beeren AusleseやTrockenbeeren AusleseとなればWein Kellerでも試飲出来るとは限らない。Bisweinなど未だ口にすることがないと云うドイツ人もいる。

ドイツ・ワインのトレンドが変ってきたなと思い始めたのは1990年頃からで、

甘ずっぱさからコクのある味へと変化が始っていた。このトレンドはフランス指向かと思えた。そう云えば前日の試飲でもそうだった。ワイン屋のマイスターの講釈を長々と聞かされた後でSektを試して見た。泡立ちもきめこまかくなり、味も想像以上に良く、Sparkling Weinの域を出てChampagneの領域に入ったと考えてもいいと思った。

続いて赤ワインも試してみた。赤はフランスと云う先入観もある我々にドイツの赤を飲む機会はありませんでしたがその理由は従来のドイツの食習慣にもあったように思える。ゲルマンとラテンの違いか、国土の豊かさ、日照時間の違いもあるのかも知れない。

ドイツのワインは食中酒と云うより食後酒であった。私が世界の名酒の一つと考えるKirsch Wasser等のSchnapsをアペッティーフに、肉料理にサラダをスタンダードな食事にして、デザートにKäse KuchenやZwiber Kuchcu等が出てくる。午後から招待された場合はケーキは夕方出る。ドイツのケーキは一般に重い。夕食が終ると夫妻で食卓の片付けが始る。それを見ながらこの亭主が日頃どれ位奥さんに協力しているか判断する。

乾き物のナッツ等を前に、ローソクの灯りの中でワインを飲みながら延々と話が続く。日付けが変わる迄続くことも多かった。積極的に会話に参加する亭主も居れば、アクビを噛み殺しながら、半分腰を浮かして女房達の果てることのない

会話におつきあいしている男もいる。

ヨーロッパの冬を経験したことのない人には、このような時間の過し方は理解しにくいかも知れない。ベルリン等の都会に居れば、コンサートやオペラ等の年間予約で対峙する人も多いが、田舎町では多くを期待出来ない。10時頃、明るくなって、3時頃また暮れて行く。冬のいんうつさをしのぐ上での生活の知恵なのだろう。

日本人がこの生活習慣の中に入るのは仲々むずかしい。日本のスライドで日本紹介（当時はまだ意味があった）をしてしのいだが、次第に話の中に入って行くにつれて、ドイツ語に自信をなくして行った。ただ、接客用にワインを探す中でワインマニアの仲間入りは出来た。生来、理論派と云うより実践派と認識しているせいか、味を試すことが中心で産地、銘柄、年度などに系統だった知識はない。ワインの産地を聞けばそこで飲んだワインの味は思い出せそうな気がする。PositivismとEmpiricismは現代科学だけでなく、ワインの世界でも大事だと思っている。

歴史と伝統に支えられていると思っていた世界に糖分よりコクの世界を求めめる傾向が現れてきたのを不思議がることもあるまい。日本酒も焼酎も歴史と伝統を捨てて女性の嗜好に追随して甘くしたり、においをなくしたりしたこともある。私自身もワインへの対応を変える必要が生じてきた。年齢的、身体的変化への対応

であって、必ずしもトレンドへの対応だけではない。

この10年、好みが白から赤へ変ってきた。わが家のワイン置き場も2/3は赤ワインになってしまった。それもフランス、スペインとラテン産が中心である。以前白ワインを他人様に強制していた頃は大量に飲む楽しさがあったからで、酒量が減り、飲酒時間が短くなってくると食事を楽しむことがワインを決める主因子となってきた。ドイツワインのフランス派転向と個人の変化とが合ったようだ。

ところでPhalzの赤ワインは充分うまい。3種類ある中でフランスのChateau Neuf de Papeとは云わないまでも、これはうまいと思えるのを見つけた。これらに加えて伝統的なEisweinも送ることにした。

いつの頃からか、ドイツを訪ねる度に暇を見つけてWein Probeを楽しんできた。ドイツの知人に「何故そんな高級品ばかり日本へ送るのか」とよく聞かれたものだ。ワインを日本へ送るとワイン価格+送料+税金となる。このコストと日本で売っているワインの値段との関係が品質選定にあたって大切で、20マルク辺が決め手でそれ以上のものがCost-Benefitとして良かった。近年ワインの税金は殆んどなくなったが、送料は数等高くなって、30マルク辺が分れ目になってきた。しかし本当の理由は日本女性がドイツの高級ワインの甘さを例外なく好むところにある。

年齢的、身体的変化は、外国を訪れて旧知の家庭に泊るのが次第に億劫になることにもつながった。また特定の家ばかり泊るわけにもいかないし、全家庭を訪ねる程の時間的余裕もない。その代りにと全員に声をかけて居酒屋やレストランでワインパーティを開くことにして十数年になる。手取り早い旧交の温め方だ。そうなってから、ナポレオンがロシア遠征に敗れて帰途立寄ったと云うWein städte Raupを始め、多くの飲み屋を訪ねた。その間、ドイツとの仕事の縁は次第にうすくなってきた。

事実F Z Kに関してはFusion、原子力安全、E P R、MOX、廃炉、廃棄物処理等、原子力関連研究もあるが全体としては脱原子力が進んでしまっている。ただE P Rは次のヨーロッパ型軽水炉としてEvacuation freeなシステムを求め、Core catcherをつけてでもその目標を達成しようとしており、これからも関心を持つ必要があるし、MOXのマルチ・サイクルも関心を持っておきたい。ただ独仏共に国内に建設予定のない現状では時間をかけて検討が続けられることだろう。

いずれにしろ、一つの終りがそこに姿を見せていることには間違いない。

「Es war einmal ein junge Wissenschaftler……と話し始めた。ドイツ語を使うこともこれから殆んどないと思いながら……私は決してドイツがこのまま原子力から完全に撤退するとは思ってもいない。H理事やK教授の頑張

りに期待し、協力もしたいと考えている。しかし、私もドイツに来る機会は少なくなったし、多くの人が退職した今、四半世紀に亘って皆さんと友情を暖めてくれたことを感謝しながら、この会を閉じたいと思う」と話して、若い時期に留学先

に選んだKarlsruheでの旧友達との一つの歴史をしめくくった。

Das ist nur einmal das kommt nicht wieder

(東京工業大学名誉教授、平 8. 11. 11 記)

— 懇話会の活動報告 —

(平成 8 年 9 月～11 月)

1. 定例懇談会

第57回・9月17日(火)

「大型放射光施設“スプリングエイト”について」

上坪宏道氏(理化学研究所理事)

第58回・10月15日(火)

「21世紀のエネルギー・セキュリティー問題」

谷口富裕氏(通産省資源エネルギー庁長官官房審議官)

第59回・11月19日(火)

「最近の核不拡散問題とプルトニウムの国際管理」

栗原弘善氏(核物質管理センター専務理事)

2. <季刊 原子力システムニュース>の発行

○第7巻第2号(平成8年9月17日刊)を発行した。

○第7巻第3号(平成8年12月12日発

行予定)の編集を進めた。

3. 『原子力と先端技術〔Ⅳ〕』の刊行計画

運営委員会幹事会の検討により、テーマを「原子力におけるロボット技術の動向」として刊行することとし、具体的内容、執筆者等を決め、明年6月開催の会員総会時に完成を目標に編集を進めることとなった。

4. 運営委員会・幹事会の開催

○第55回 9月17日(火)

○第56回 10月15日(火)

○第57回 11月19日(火)

上記の通り運営委員会・幹事会を開催

・定例懇談会の演題・講師

・<原子力システムニュース>の内容

・<原子力と先端技術〔Ⅳ〕>の内容

など当会の業務・運営につき審議・検討した。